

2022年度 児童発達支援事業 恵の実「ポップくん」事業報告書

1、理念

ひとり一人の意欲を大切に、たくましく、かしこく、やさしく育つことを願いながら、発達の弱さをもつ子どもも含め、0歳から学童、大人まで共に育ち合う共同の子育てをめざします。

2、保育目標

- ① 「たべる」「ねる」「あそぶ」「はたらく」ことを通して、子どもの内なる自然を育てる。
- ② 恵の実保育園と連携した交流保育の中で、仲間と共に様々な体験をしながら、子ども同士の関わり合い、育ち合いを大切にする。
- ③ どんなに障がいが高くとも、人間の育つ道筋は同じである。一人一人の発達に合わせて、ゆっくり丁寧に積み上げていく。
- ④ 大人が安心して子育てに向かえるよう、親同士のつながりを作り「子育て」と「親育ち」を学んでいけるようサポートする。

3、2021年度実績

- ・登録者人数 13名 (毎日利用の児童 10名/他の事業所や保育園との併用の児童 3名)
- ・定員 10名
- ・利用実績

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
開所日	20	21	23	21	22	22
延べ利用者数	211	229	242	220	191	213
日平均	10.6	10.9	10.5	10.5	8.7	9.7

10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
22	22	22	20	20	25	21.7
207	231	222	209	212	255	220.2
9.4	10.5	10.1	10.5	10.6	10.2	10.2

4、児童の処遇

(1) 健康管理

アセスメントを行い、子どもの健康状態、発達の様子、生活リズム、家庭環境、保護者の精神状態等を確認・把握し、その上で支援の方向性の検討を行っている。

毎日利用の児童は月に1回身長体重測定を実施し健康管理を行った。

<新型コロナ対策関連>

朝の検温やその日の健康状態の把握など、家庭との情報共有を意識して対応した。療育活動では、子どもたちがマスクを着用することは難しい為、外での活動を多くし、室内活動の際は窓を開けて換気を十分に行い、児童が手洗い消毒をしっかりと行えるよう介助するなど、感染症対策を意識しながら療育を行ってきた。また、風邪症状がある児童については、早めに自宅療養をお願いすることで感染の拡大防止に努めてきた。

ホップくんでは、7月に1名、8月に4名、9月に1名、1月に1名のコロナ陽性が確認された。他にも、農耕接触者として長期自宅待機となった児童が3名、また、7月には、3歳児と4歳児が、共に二日間のクラス閉鎖となった。コロナ陽性の方を除き、自宅待機をされている利用者には、電話対応での支援を行い、子どもや家族の様子を確認すると共に、家庭での過ごし方のアドバイスをしたり、保護者の不安などを聞くことを大切にしました。

また、10月にはヒトメタニューモウイルス感染による入院での長期休み、1・2月には水疱瘡による長期休み、また、母の出産による長期休み児童がいた。

(2) 療育内容

アセスメントを基に個々の課題に応じて個別支援計画を作成し、職員間で個々の課題を共有しながら療育を行ってきた。6か月に1度は個別面談を行い、事業所での活動の様子を写真や映像を使って分かりやすく伝えるよう心掛けている。

ダウン症児や肢体に障がいを伴う児童が半数近くおり、「食べる」ことに課題がある児童の割合が多い。給食職員と情報共有や連携をし、個々に合わせて「食べる力」を伸ばしていけるよう対応している。

理学療法士の専門性を活かして、個別支援として個々に合わせた身体への取り組みなどを丁寧に行ってきた。

個々の様子に合わせて交流する保育園のクラスを決め、クラスの仲間と生活や遊びを共にし、大人や仲間など人とのつながりの中で個々の力を伸ばしていけるよう療育を行ってきた。個々の様子や課題に応じて職員が配慮をしながら、季節の行事活動や事業所外活動にも参加をしてきた。

体験活動については、事前に個々のねらいと配慮点等を明確にした活動計画を立て、それに基づき活動を行っている。また、事業所外で行う体験活動では、ねらいや配慮点等を保護者に説明し、書面にて同意を得てから活動を行ってきた。

<体験活動>

5歳児	年長交流、牧場に牛糞を取りに行き畑づくり、鯉つかみ、魚釣り、水族館、豊橋動物園、観劇、乗馬体験、卒園旅行
3～5歳児	畑作り、野菜を収穫しての調理、鯉のぼりを見に行く、梅や枇杷採り、いちご狩り、トウモロコシ狩り、ホテルを見に行く、山登り、動物との触れ合い、秋の散策、栗拾い、草滑り、芋ほり、大イチョウ、大根収穫、雪遊び、人参収穫、草滑り、ふるさと公園、海あそび

新型コロナウイルス感染症対策の観点から、行事については集団的密集を避ける工夫をしながら、法人内の他の事業所と共に、できるだけ実施できるよう取り組んできた。

年長児2名が3月に卒園を迎えた。

(3) 安全管理

火災、水害・土砂災害、地震を想定した避難訓練を月に1回程度行った。実働に合わせて、他事業所と協力し合って災害対策ができるよう、法人としての消防組織を設置している。避難訓練の後には反省を行い、災害の際の児童の把握の仕方や児童への配慮点の確認、職員同士の連携の仕方等を確認しあった。歩行が十分に確立していない児童も多いので、いかに職員同士が声を掛け合い、連携をして避難させるかが重要である。

また、冬場の避難訓練では、避難時の寒さ対策が必要なことが分かり（防寒シートは準備されているが、ホップくん利用児には使いにくい）、避難袋に一人一人の防寒セットを用意するなど、災害時に必要なものについて見直しを行った。

5、職員の処遇

（1）職員会議

職員会議を定期的に行い、児童の発達の様子や療育内容等を検討し合う場を保障してきた。職員が問題を抱え込まず、職員間で共有し考え合うことで、療育の方向性を見出していくことを心掛けてきた。また、高クラス会議や低クラス会議などにも職員が積極的に参加し、保育園職員との連携がしつかりとれることが、統合保育における職員と子どもたちの集団作りにつながっている。

（2）研修

事業所内研修

- ・権利擁護と虐待防止の学習会
- ・水・山の安全学習会
- ・保育報告会の動画から学ぶ会
- ・東海地区職員学習会

外部研修

- ・気になる子への支援方法について
- ・愛知県サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者更新研修
- ・自閉所スペクトラム症ー診断と支援の新しい潮流ー
- ・気になるこどもの保護者と関わるポイント
- ・発達障害とトラウマ
- ・愛知県障害者虐待防止・権利擁護研修（従業者向け）

6、施設管理

（1）設備、備品関係

児童の身体に合わせた椅子や補助具、また児童に合わせた歩行器を使用することで、児童の生活のしやすさや遊びの広がりにつなげている。

担当職員により、季節に合わせたホップ棟内の装飾が施され、児童が心地よい空間で過ごすことができる。

必要に応じて段差を積極的に利用し、子どもの危機管理能力の向上につなげており、すべてをバリアフリーにはしていない。しかし、バギー等の補助具を利用する児童もおり、バリアフリーを必要とする部分については見直しを行い工夫している（スロープの使いやすさ、トイレの工夫など）。

7、保護者に向けて

やりとりノートを活用し保護者と子どもの様子を情報共有するとともに、送迎時にはできるだけ保護者と話をする時間を作り、保護者との信頼関係を築いている。不安を抱えている保護者の方には、事業所での児童の様子を映像にとって保護者に見せるなど、より丁寧な支援を心掛けている。また、不安を抱えている保護者の様子を職員間で共有し、職員みんなで気にかけていけるよう連携をとって

きた。必要に応じて母子（父子）通園や家庭訪問を行い、家庭支援を行っている。

家庭訪問・・・家庭での食事支援。

家庭での遊び方のアドバイス。

麻痺のある児童への家庭での生活の工夫についての支援。

1か月に1回程度、茶話会を実施した。ダウン症親の集まり等テーマ別で行ったり、ステップくんの保護者にもアドバイザーとして参加してもらうことで、先輩保護者の子育ての経験談を聞く機会となり、保護者の不安軽減や子育ての見通しにつながっている。また、保護者同士のつながりができ、休日に保護者同士声を掛け合い集まるなど、孤独な子育てにならない土台づくりにもなっている。

8、苦情受付

法人として意見箱を設置。苦情報告は特になし。

下半期、利用者アンケートと事業所自己評価を実施。事業所自己評価については、結果をホームページに掲載して公表した。

9、虐待対策

・支援者による虐待対策として、県主催の虐待防止の研修に職員が参加し、そこで得た知識を会議で共有してきた。また、法人で設置された虐待防止委員会を定期的に開催。そこで対策を確認し、事業所として、現場で「これって虐待に当てはまる？」と浮かぶ事案を、ホップ会議で出し合い、どんな虐待に移行する危険があるか、どんな対策が必要か、を定期的に話し合ってきた。それにより、虐待の芽を摘むことはもちろん、療育の質の向上につながっていく事実感した1年であった。

- ・気になる様子があれば職員間で情報共有をし、保護者の悩みに迅速に対応していけるよう心掛けた。母親が不安定になりやすいケースについては、父親との情報共有や連携が取れるよう対応している。
- ・虐待案件はなかった。

10、ヒヤリハット・事故

ヒヤリハット 16件

事故 3件

発生月	事故内容	再発防止策
5月	給食後、片付けの際に一時的に机の上に置いておいたお皿を3歳児男児が投げ、別の3歳児男児の足に当たり、足の甲に5mm程度および足の薬指に2mm程度の切り傷が生じた。	使い終わったお皿類は机に置かず、速やかに食器入れに入れる。食器入れは介助する職員の足元に置き、動線を短くして見守れるようする。
10月	葦毛湿原で木登りをしていた際、4歳児男児がバランスを崩して高さ1.5mの場所から転落。額、右頬を打ち、右腕に擦り傷を負った。豊橋市民病院を受診。6時間の経過観察後、異常なく帰宅。	事故発生時、雨上がりだったため枝が湿っていたことも一因と考えられるため、当日の木の状況を登る前に確認し、靴を脱いで足元が不安定にならない状況で行うようにする。 万が一の落下に備え、大人がすぐに手を貸すことができる場所で見守る。
2月	3歳児男児が左手に折り紙を持ち、右手で手す	手に何かを持って階段を昇降しない。

<p>りを持って職員と共に階段（職員室に上がる階段）を上っていた。登っている途中、2段目で折り紙を落とし、それに気が付いて男児が自ら拾いに戻った。折り紙を拾い、職員が男児の前に上がって折り紙を預かろうと声を掛け、男児が右手に持っていた折り紙を左手に持ち替えようとして手すりから手を離してしまい、バランスを崩して階段下まで転落、左頬に擦り傷を負った。</p>	<p>階段、斜面、山道等も含み、職員は必ず対象児の下側（上りでは後ろ側、下りでは前側）の位置から外れない。</p>
--	---

ヒヤリハット及び事故について、職員間で周知するとともに、職員会議でも再度周知を行った。

麻痺など肢体不自由の児童が歩行器等の補助具を使用しており、その補助具に関するヒヤリハットが増えている。また、毎年異物による窒息に関するヒヤリハットも起きている。年度初めには1年間のヒヤリハットを見直し、職員間や保護者で理論と対策を確認し合ってきた。

<安全対策に関する学習会>

救命救急法（初級）

他の保育園等での事故の報告を共有し、事業所での安全対策の見直し（他園の死亡事故）

水、山の安全学習会

感染症対策（嘔吐処理、RSウイルス対策について）

誤嚥対処法（気道異物除去）

熱中症、マムシ、蜂等について

1 1、地域社会との連携

- ・豊川市内の児童発達支援事業所共有会議が開催される際には代表者が参加し、情報共有を行っている。
- ・岡崎女子短期大学の学生1名の長期実習（週1日、8ヶ月間）の受け入れを行った。

1 2、2022年度の状況と分析

- ・2月に実施した事業所自己評価を見ると、統合保育の良さを実感して頂いており、母子通園などの保護者支援を丁寧に行ったことで、保護者の方の安心につながっている様子があった。一方、衛生面や安全面についてのご意見が数件あり、改善すべきところは改善を図りながら、ホップくんの療育方針として大事にしていることを保護者と丁寧に共有していく必要性もある。
- ・肢体不自由の児童が2名おり、歩行器や立位（座位）保持装置などの補助具を使用している。児童の成長と共に動きが活発になり、補助具に関連したヒヤリハットが増えている。安全に配慮しながら補助具を有効に活用していけるよう、補助具の使用の仕方について定期的に見直しを行っていく。
- ・ヒヤリハットについては、毎年異物による窒息につながるヒヤリハットがある。「食べる」ことに課題のある児童が多いため、保護者と共に定期的に食事に関する配慮点を確認し合い、また異物除去の実習を実施していくことが必要である。

1 3、次年度の方針、課題

- ・今年度3名（毎日利用2名、週4日利用1名）の児童が卒園し、次年度は新たに3名の児童が利用

開始となる（3名とも毎日利用）。一クラスに対して複数担任での職員体制となるため、職員間での連携が課題となる。

- ・新入職の職員が3名配置されるため、指導・学習を計画的かつ充実させる必要がある。
- ・ホップくん独自の活動（アート、クッキング、ホップくんお泊り会、遠足等）により、個別の活動およびスモールステップの支援を充実させる。
- ・ホップくんでは、身体に課題を抱える児童が多いため、今後も理学療法士の専門性を活かし、身体づくりに対して丁寧な支援を行っていく。
- ・今年度丁寧に行ってきた母子（父子）通園や家庭訪問などの家庭支援を引き続き大事にし、保護者が子育てに希望を持てるよう支援する。また、保護者同士の交流を深めるため、茶話会を充実させる（家族交流としての茶話会、父親を対象とした茶話会を行う）。
- ・虐待防止対策委員会を設置し、虐待防止についてのマニュアルの作成、職員への研修、その他虐待に対する対策等について検討し合っていく。
- ・自発管の交代に伴う業務分担の整理・引継ぎを行うとともに、福祉事業として整備が必要なものを見直し、ステップくんと連携して法人としての福祉分野の充実を図っていく